

主題：精神疾患を有する学生の実習教育に必要な要素

— 相談援助職としての現場での体験から実習教育に必要な要素を見出す —

○ 東京福祉大学 氏名 谷口 恵子 (9122)

鹿内佐和子 (目白大学・9130)、姜 壽男 (東京福祉大学・8504)

キーワード3つ：ソーシャルワーク実習、TEA(複線経路・等至性アプローチ)、精神疾患

1. 研究目的

日本は2014年「障害者権利条約」を批准し、また、2016年に施行された「障害者差別解消法」により、「教育における合理的配慮」が国立大学では法的義務、私立大学では努力義務とされ、大学における障害学生支援は大きな転換期を迎えている。

障害学生の中でも、精神および行動の障害に分類される精神障害、発達障害の学生数は近年急速に増加している。日本学生支援機構の調査によると、平成28年度の障害学生種別割合では、精神障害(24.9%)、発達障害(15.2%)と、併せて障害学生の約4割を占めていることになる。本研究者は、社会福祉士や精神保健福祉士の養成に携わっているが、高等教育機関で学ぶ障害学生数が増加する中、障害を抱えながら社会福祉士や精神保健福祉士といったソーシャルワーク専門職を目指す学生数も増加していることを実感している。

障害を持つ学生が「社会福祉援助の主体者」として、福祉専門職を目指すことは、同じ当事者としての視点から利用者にとって有意義であること(柿本, 2004)が見出されている。また、加藤(2005)は当事者出身のソーシャルワーカーの可能性と課題をインタビュー調査により明らかにしており、その可能性を、「目の前にいる一人ひとりの対象者との信頼関係を築くことこそが、自己を成長させ、社会を変える一歩であることを認識」することで、「人間性を社会に回復させる力をもっている」と結論づけている。

本研究者は、精神疾患を有し福祉系資格取得を目指すことには大きな意義があるとの認識から、適切な配慮をしながら、質の高い養成教育とはいかにあるべきかを導き出すことを目的に、3名の精神疾患を有して福祉実習を体験し、卒業後対人援助職に就いた者にインタビュー調査を実施し、TEA(複線経路・等至性アプローチ: Trajectory Equifinality Approach)で分析し、対人援助職に就くにあたってのサポート要因(SG)、阻害要因(SD)を見出した(「精神疾患を持つ学生のリカバリーに関する研究」第64回社会福祉学会にて発表)。

SG、SDともに複数の要素が見出されたが、精神疾患を有する学生がソーシャルワーカーとして成長していく過程において、現場に出てからの体験や、その体験を通して実習を振り返るという点に重要性を見出した。これを受け、精神疾患を有し、ソーシャルワーク教育を受け、対人援助の現場に複数年いた者を対象にインタビュー調査を実施し、実習及び教育を通して、ソーシャルワーカーとして活躍する基礎が培われるために、養成側として出来ることを見出したいと、本研究に取り組んだ。

2. 研究の視点および方法

障害者権利条約に掲げられている「合理的配慮」は、個々人により配慮の内容や程度は異なる。また、配慮を行う側にも限界はあるため、実現可能な配慮を検討することが必要であるが、そのためには、何よりも当事者の意思を尊重することが求められる。つまり実習教育においては、権利の主体は学生本人にある。

この視点に基づき、本研究では、精神疾患と診断を受けながら実習を全うし、対人援助職に就いた者4名にインタビュー調査を実施し、専門職として働く中で具体的に役に立っている事や自身の価値観の変化などを質的分析の一つである TEA によって分析した。TEA は、「時間を捨象せず個人の変容を社会との関係で捉え記述しようとする」(安田・サトウ編著 2012)もので、一人ひとりの体験を丁寧に扱い分析するため、対象者の視点が十分に生かされ、不可逆的な時間の流れの中で、対象者がある行動を選択するために影響を与えた社会的、文化的な影響と個人的な影響の両者の要素を見出し行動変容と価値観の変容を分析することを可能にする。

3. 倫理的配慮

本研究は東京福祉大学倫理・不正防止専門部会により承認を得ており、一般社団法人日本社会福祉学会研究倫理に基づき、調査対象者に対して研究の目的及び研究結果の使用については個人情報の保護を厳守することを書面で説明し、同意を得ている。

4. 研究結果

本研究における等至点(不可逆的な時間の流れの中で、至る点)を「精神疾患とつきあい、納得のいく生き方をみつける」と定め、対象者に共通する SG(サポート要因)、SD(阻害要因)として、①実習受入れ機関の環境と指導者の在り方、②養成機関における教員、同級生、教育の在り方、③家族の在り方が見出された。

5. 考察

結果を基に、実習教育においてソーシャルワーカーの専門性を身に着けるために必要な要素は何かについて現在考察をしている段階である。当事者体験を活かすとともに、ソーシャルワーカーとしての専門性を意識しながら仕事をする大変さをインタビューの中で聞き取ることができた。個人の病気との付き合い方、専門職に対する思い、その他複数の個人因子、環境因子により、ソーシャルワーク専門職として働く困難さもストレスも異なる。ソーシャルワーク専門職を養成する機関として、それぞれの多様性を活かしつつ、専門性を核とした実践を積むことができるよう、実習終了後(対人援助職に就いた後)もスーパービジョンや、生涯教育のできる場を提供することの必要性も示唆された。

【参考文献】

サトウタツヤ、安田裕子(2012)「TEMで分かる人生の経路 質的研究の新展開」誠信書房

※本研究は、平成28年度公益財団法人上廣倫理財団研究助成を受けて実施しました。